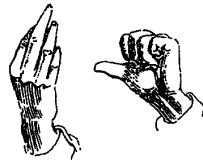


創立100周年記念講演

フレーベル思想の今日的意義

山口大学教育学部助教授 莊 司 泰 弘



Der kleine Gärtner.

„Blüht Du des Kindes Sinn für
 Lebenspfleg' entfalten,
 So mache, daß es mög' für Lebens-
 pflege walten!
 Blüht Du Dein Kind für innere
 Lebenspfleg' bereiten,
 Verschaff ihm, wo Du kannst, der
 Lebenspflege Freuden.“

Komm, wir wollen in den Garten,
 All' die Pflänzchen dort zu warten:
 Wollen sie gar schön begießen,
 Das die Knöspschen sich erschließen.
 Die Knöspschen sich entfalten nun;
 Sie grüßen Dich mit süßem Duft,
 Womit sie durchwürtzen die ganze Luft.
 Belohnend ist es, wohlthatun!



- ① グループ
- ② 遊ぶ大人
- ③ 自己教育
- ④ 花園
- ⑤ 感覚的知能

フレーベルの「キンダーガルテン」(der Kindergarten)は明治9年(1876)に東京女子師範学校附属幼稚園として導入されました。しかし、当時の日本は仏教や儒教の影響が色濃く、フレーベル教育遊具が「恩恵をもって仏や父母から賜った物」という意味合いで恩物と訳されたり、キンダーガルテンが「指導を必要とする幼稚な者の園」と訳されたように、大人は権威をもって子どもを指導しなければならないという思想が根強かったようです。内村鑑三の不敬事件やキリスト教の排斥運動の影響を受け、フレーベルが拠り所としていたプロテスタントのキリスト教思想抜きで日本に紹介されたわけです。その結果日本独特の風土で歪められた「キンダーガルテン」の思想が5つありました。

① グループ——フレーベルが大切にしたのは、異年齢間の縦割り状態の関わりであり、横割りの年齢別「クラス」ではありませんでした。明治9年に東京女子師範学校附属幼稚園が開設されて以来、「クラス」活動が120年続いています。小学校の学級指導の準備として、「子どもの園」の「グループ」は変質して伝わったのです。競争原理ゆえの「落ちこぼし」、クラスセクト主義ゆえの「閉鎖性」、集団意識ゆえの「いじめ」、などなど、私には「クラス」を尊重する意義がわかりません。「子どもの園」本来の「グループ」を見直す時期に来ているのではないのでしょうか。散歩に行きたい子ども達が仲間を募り、鬼ごっこやサッカーをしたい子ども達が仲間を募り、子どもの自由選択を基調に「子どもの園」の活動は始まります。芸術家の精神が作品に反映されるように、神の被造物である人間には全てのものを配慮される神の精神が宿っているのです。子どもが「先天的」に持っている「やさしさ」や「思いやり」、「博愛」や「奉仕」の心は、万物を調和のとれた自然有機体として創造された神の意志の確認でもあります。自然有機体の一部分として創造された人類は、他の事物や事象と有機的に結びついているのです。「子どもの園」は神の天地創造に裏付けられた「部分的全体」思想を基調とする「グループ」の仲間意識を表現する「地上の天国」なのです。「部分的全体」思想が示す、「生命共同体」意識は、弱みやハンディキャップすら「持ち味」として受容します。「部分的全体」思想が示す、「共同原理」は、「助け合い」や「援助」をグローヴァルな規模で理解するのです。したがって、「クラス」(学級集団)が示す画一性や、弱肉強食の社会ダーウィニズムを肯定する「競争原理」は、「子どもの園」には無縁の発想であってほしいのです。

② 遊ぶ大人——女の子に種を手渡している大人がいます。自分で種を蒔いたり、手入れした方が上手に、早くできるのに、ワザワザ子どもにまかせているのです。やり方を指導するのではなく、やりたい気持ちを育てるためなのです。当時の日本はアメリカの影響を受け、実学的なもの功利的(安い、早い、大量な)なものを大切に、合理的思考を尊重

していたと言えましょう。神や神秘を排除し、見えないものは見えないし、聞こえないものは聞こえないと割り切ってきたのです。しかし、キリスト者のフレーベルが創造的活動衝動を育むための学園、「子どもの園」での創造活動を通して確認したかった内容は、「なぜ人は生き、なぜ生き様を表現しなければならないか」なのです。神の似姿に創造された人類には、生命共同体としての万物を調整する使命が託されており、対立する関係を調和する創造活動が生き様として要求されているのです。したがって、「子どもの園」では、掃除の仕方や方法ではなく、片づきたい気持ちを大切にすることです。ゴミが落ちていたら、子どもを呼び集め、清潔にしなければならない理由と片づけ方を説明し、子どもに掃除させる方法論では片づきたいという気持ちは育ちません。むしろ、ゴミに気づいたら、黙ってゴミを拾っている「遊ぶ大人」(der spielende Erwachsene) があり、「なぜゴミを拾うの？」と、集まってくる子ども達に意義があるのです。大人が指導をしないと、知識や技能が身に付かないという考えもありますが、大人が指導して身につけさせた知識技能は、他から与えられたものに過ぎず、大人が側にいて指導しないと発揮されにくいものです。フレーベルは子どもの「遊び」(das Spiel) を「自由に自発的に自己の内面の創造性を表現する活動」と理解し、神の創造性を模倣する行為として尊重しています。キリスト教の生命共同体を前提とする子ども同士の「遊び」の中では、方法論的指導行為(命令・制限・干渉)が探求的援助活動に変容するのです。大人が権威によって指導する方法をフレーベルが排除した理由がここにあります。3歳児・4歳児・5歳児と遊ぶ30歳児・40歳児・50歳児の「遊ぶ大人」がいる子ども達だけの環境だからこそ「子どもの園」なのです。40歳児と40歳の大人の違いは、子どもを教育しなくてはならないと思いつこんでいる権威ある大人の教師ではなく、3歳児、4歳児、5歳児の時期を体験してきた「先生」(先に生きている子ども)にあります。子どもを教育する権利や義務を大人が持つなどと不敬な心をもたず、神が創造された同じ被造物として子どもと対等な仲間なのです。

③ 自己教育——フレーベルは子どもを花に例えましたが、ジョウロで水をかけている中央の子どもは子どもである植物に水をかけていることになります。年少児が手本にしたり、教えてもらおうとするのは、年長児や、すでに体験を積み重ねている子どもであり、権威を以て教えようとする大人ではありません。他の子どもがしている活動をじっと見ている子どもは、心情で一緒に参加しているだけでなく、どのようにすればよいのか見て学んでいるのです。今は自分はできなくても、今はしてみたいとは思わなくても、一緒に楽しんだ体験を共有する仲間があんなに一生懸命になっている。だから、きっと自分もできるようになるし、自分もぜひやってみたいという心情が熟成していくわけなのです。大人に教えられた知識と異なり、子ども達自身で培った信頼を基盤とする心情に裏付けられている

ため、方法を覚えるだけでなく、より一層してみたいという気持ちが育つことになるのです。3歳児から30歳児までの異年齢同集団で「子どもの園」が構成されている理由は、子ども同士の育ち合いという教育効果にあるのです。フレーベルの「子どもの園」では一日の活動を皆の前で確認することが大切にされていました。一日中砂場で遊び込んでいた子どもであっても、水遊びをしていた子どもや散歩をしていた子どもの喜びを共有できるのです。同時に異なる場所での活動を体験できる「子どもの世界」ならでは、共同感情と信頼を基調にした教育こそ「子どもの園」本来の魅力と言えましょう。1つのパンと1杯のブドウ酒を分かち合うキリスト者の喜びと奇跡は「子どもの園」では日常茶飯事なのですが、残念ながら、同じことを同じだけするように設定された画一的な一斉指導が日本では定着し、一人ひとりの思いや、選択する自由は無視されてきたのです。

④ 花園——チューリップ・サルビアなどの花壇は、同じ種類の花でまとめているため、同じ分量の日光や肥料、水などを与えることができ、管理がしやすいようです。保育で考えた場合、画一活動や一斉活動になりやすい傾向と考えられます。フレーベルは役に立つ花、高価な花だけを尊重するのではなく、名もない野辺の雑草、一木一草にいたるまで固有の特徴を持つことを大切に考えていました。有益で管理しやすい貴重な花にばかり目を向けた花壇のような保育ではなく、一人ひとりの子どもを花に例え、水をやりすぎたり、日に当て過ぎたら枯れる花もあること、肥料さえ与えればよいという発想ではなく、一人ひとりの発達状態や興味に目を止め、一本いっぼんの花に異なる手入れや関わりを持つとする姿勢こそ「子どもの園」の姿勢ではないでしょうか。人間の教育は神の意志に委ねられることが大切なのです。ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778) は自然による教育を訴えました。自然の状態だと植物は太陽に向かって真っ直ぐ育つのに、人間の手にわたると盆栽のように切ったり、曲げられたりされてしまいます。だから、人間の教育は人間にまかせるのではなく、自然に委ねようとしたわけです。フレーベルはルソーの主張をさらに発展させました。神があまねく支配されている自然の摂理に幼児期に触れることこそ「人間教育」(Die Menschenerziehung) に他ならないと考え「散歩」や屋外での「自然環境探求活動」を「子どもの園」の日課の大半にしているのです。だから「子どもの園」には花園や自然環境豊富な庭があるのです。しかし、残念ながら日本の幼稚園には園庭ではなく、石灰や塩を撒いて雑草が生えないようにし、平らにするために瓦礫を地中に敷き詰めて、ミミズやモグラさえ住めない、ただただ広だけの運動場があるのです。「幼稚運動場」では神の愛は育ちません。動物の飼育に名を借りたウサギやニワトリなどの小動物を檻に閉じこめて飼い殺す弱い者いじめ、水をやらないと枯れてしまう植木鉢での栽培や、無用な雑草を根絶やしにする無慈悲さ、これが愛のない日本の幼稚園の実

態なのです。大きな樹木や実のなる木があり、水場に野鳥や小動物が集まってくる「子どもの園」、命ある雑草を植え替える「子どもの園」との違いは明白ではないでしょうか。

⑤ 感覚的知能——中央の子どもは裸足で地熱で温んだ水が足下の草にしみ込んでいく感覚を楽しんでいます。水をかけないと枯れてしまうからジョウロで水を撒きなさいという指示があったからではなく、草が喉が乾いたよと言っているから水をかけているのです。話すことができないイヌやネコに言葉を貸し与え、無生物であっても子どもは感情移入することで共感できる。まさに、天国の門は幼子のために開かれているのです。イヌはワンワン、ネコはニャーニャーとしか鳴きません、木や石に話しかけても無駄です、あなたの感覚が未分化だから生じる錯覚なのです、と決めつける大人には理解できない「生命共同体」の世界に子どもは住んでいます。見えないものを観ようとし、聞こえないものを聴こうとする子どもの世界を受容するためには、大人と子どもの捉え方の違いが前提となります。子どもは身体で考える感覚的知能の時期にあるのです。私たち大人は言語性知能で概念を操作して判断・推理しますが、子どもは動作性知能でイメージを操作して直観しています。頭で考えてから行動する大人と違い、行動してから考える子どもには試行錯誤しながら感覚体験を積み重ねることが大切になるわけです。フレーベルが「まず、やってみなさい。それから考えて、またやってみなさい」と私たち大人に勧めるのは天国に至るヤコブの梯子なのです。

芸術家の精神が作品に反映されるように、神の被造物である人間には神の精神（対立する物を調和する不断の創造性）が先天的に宿っています。遊びは子どもに内在する神性の表現であること、対立するものを調停する使命が人類に託されていることを理解してみましょう。使命を全うするために子どもには下記の特質が先天的に与えられているのです。

- ① 共同感情——時代・言葉・国が異なっても、人類に共通する先天的感覚
- ② 直観——見えないものを観、聞こえないものを聴く先天的総合的感覚

芸術家の精神が作品に反映されるように、各事物には「先天的」(das Apriori) に有機生命体としての自覚が宿っているわけです。「人類」(das Menschengeschlecht) には「先天的」に「人類共同体」(der gemeinsame Mensch) への憧憬があり、「人間」(der Mensch) には万物が有機生命体と合一しようとする活動を援助する「人類の使命」(die Bestimmung des Mensch) が与えられているのです。対立するものを調和し、万物の「生命合一」(die Lebenseinigung) を援助するという「人類の使命」を果たすために、「人間」には「直観」(die Anschauung) 「共同感情」(das Gemeingefühl) が「先天的」に備わっています。「共同感情」

によって、万物は「対立する同一物」(die entgegengesetzte Gleiche)であることを自覚し、見えないものを観、聞こえないものを聴く「直観」によって、「生命合一」の道を見いだすわけです。私たち大人よりも、子どもにこそ「先天的」要素として、「共同感情」や「直観」が強く現れています。物言わない動植物に「言葉」(das Wort)を貸し与え、無生物にすら「感情移入」(die Einfühlung)する子ども時代特有の傾向こそ、「子どもの園」で大切に育まなくてはならない「人間教育」(die Menschenerziehung)の本質といえましょう。

人間が人間に命令することについて——フレーベルは「命令的、干渉的教育は主として、ただ2つの場合だけなのです。明瞭な生き生きとした思想、事実と一致する自己証明できる理念である場合か、既に昔からあり、承認されてきた非難の余地のない場合です。(中略)しかし、かつて現れ是認された最も完全な非の打ち所のないものや、是認された最も完全な非難の余地のない生活は、唯一の非の打ちようのない本質、非の打ちようのない傾向を望むのであって、決して非の打ちようのないものに則った形式を望んだのではありません。もし、形式的な完全さが非の打ちようのないものよりも勝っていたならば、形式の上から非の打ちようのないものを望むのは、全ての精神的なもの、人間的に非の打ちようのないものへの最大の誤解になります。(中略)それゆえにイエスは、生活においても、教えにおいても、非の打ちようのないものを外面的に固持することに対して戦われたのです。精神的で、傾向的な、生き生きとした非の打ちようのないもののみが理想的に固持されるべきであり、見え方や形式などは自由に与えられてくるものなのです」と記述しています。干渉したり命令できる場合は、神の意志が働いている時だけであり、歴史上の完全無欠な人物といえども成しえなかったわけです。しかも、最高の人間とも言えるイエス自身が、命令したり、干渉したりする時に必要な基準、非の打ちようのない価値基準が固着することに対して戦っておられます。すなわち、人間には人間に命令したり干渉したりする権利は与えられていないとフレーベルは結論したのです。私達大人の社会は宗教戦争やアドルフ・ヒットラーの社会ダーウィニズムによるユダヤ人虐殺などの人類の歴史の暗黒面に見られるように、誰かがあたかも自分が非の打ちようのない価値基準を持ったかのように錯覚し、価値基準を押しつけるために命令し、干渉し、ひいては戦争や虐殺を繰り返しているようです。人類の歴史を紐解くまでもなく、私達は身近な教育の分野で、人間が人間に価値基準を押しつけてきたと言えましょう。人間が人間を人間とも思わないで、子どもの「自己活動」を考えることはできません。「最初の微笑によって若き人間は直ちに他の各被造物から区別される。最初に微笑した時、自己形成の段階、自覚の段階を示し、人間になったことを示すものであり、最初の微笑は、人間の尊厳、人間の本質を示しているのです。(中略)各自の一般的な表現によって、既に人格、人間の独自性(個性)が表

現されているにもかかわらず、子どものこの最初の表現は、微笑が一般に喜ばしくて好ましい印象を与え、子どもが人間になった印象を、さっ引いても人間になろうとしている印象を与えるのに、周囲の人々にそれほど意味のないものとして見過ごされている」と記述しているように、フレーベルは乳児から人間としての人格と尊厳を認めています。だからこそ、同じ人間が人間に命令したり、制限したり、干渉する権利を行使することを許さないのです。

人間が人間を制限することについて——キリスト者における神は万物の創造主であり、芸術作品が芸術家の精神を反映するように、神の似姿として創造された人間には神の精神が宿っています。神が第7日目に休まれるまで6日間も万物を創造し続けられた創造力が人間に宿っているといえましょう。フレーベルにとって、人間に内在する「創造的活動衝動」に従い、形ある物を作り出すことは、生きていくことの表現に他ならないのです。「人間が働いたり、行動したり、創造したりするのは、ただ自分の身体、肉体を維持するため、衣食住を手に入れるためだというような考えは、許容するだけで、広めたり、伝えたくない、卑しい考えです。そうではなく、——人間の創造の起源と本来の創造は、人間の中にある精神的なものによって、神的なものを自分の外に形作るため、また、自己自身の精神的、神的本質や神の本質を認識するためのものなのです」と述べているように、物を作り出すことは何らかの目的のための手段ではなく、目的そのものだと考えています。物を作り出すことで自分の内にある創造性を見直し、創造性の根元に働いている神性に気づくことこそ幼児教育の目的なのです。「創造的活動衝動」に燃えている子どもを見るに付け、私達大人がすり減らしてきた創造性を悔やむ気持ちが増してくるのではないのでしょうか。子どもの持つ旺盛な「創造的活動衝動」とは、人間の可能性に他ならないのです。子どもの可能性の方が大人の可能性よりも大きいのですから、小さな可能性の者が大きな可能性を持つ者を制限してよいのでしょうか。フレーベルにとって、子どもはより神の創造性に近い者であり、『自分の最も内奥の本質におられると私達が確信しているイエス、私達の最大の模範として認識しているイエスは、「子ども達を私の下にこさせましょう。子ども達を妨げないでください。天国は子ども達のものだから」と言われた。この意味は、「子ども達を妨げてはいけない、少なくともまだ、子ども達の内には天の父から子ども達に与えられた生命が、分かつたることなく、いまだに息づいており、そしてまだ、子ども達には生命の自由な展開が許されているから」ということではなからうか』と、子どもの自発的創造活動を尊重する理由を述べている。クッキーの生地を形抜きして、同じ大きさや形に画一化することと、子どもの可能性を型抜きして画一化することとは異質なものなのです。すなわち、画一化と創造性は相反する概念と見なされます。だからこそ、大人が

子どもを制限することをフレーベルは許さないのです。

人間が人間に干渉することについて——フレーベルはルソーの発想を反映して「若い動植物を休息させ、動植物に無理な干渉的影響の試みを慎もうとします。そうしなかったら動植物の純粋な発育や健全な発達が妨げられるということを知っているからです。しかし、若い人間にはロウか粘土の塊でもあるかのように、思うままにこねくり回せると考えています」と記述しています。ルソーが単に人為的な働きかけを排除し、自然のままの教育を提唱したのに比べると、フレーベルは大人、特に教師に対して的を絞って訴えかけているのです。私達教師は子どもに何か働きかけなければならないという強迫観念を持っているのかもしれない。意図的に大人から働きかけられた子どもの状態について、さらにフレーベルは、「ナシやリンゴが1本の樹に実るよりも、ナシやリンゴを、より簡単に、また1000倍も早く、またより美しく、ロウから作れることも私達は喜んで認めましょう。しかしながら、ロウで作られた果実がどんなに美しく、どんなに早く見えるとしても、ただ眺めるためのものだけであって、つま取ることもできません。ロウでできた果実は喉の乾いた者に元気を回復したり、病める者に生気を与えたりすることもない。むなしい——無価値なものである」と記述し、人為的な干渉の無意味な結果を指摘しています。だから、フレーベルは「全ての恣意的で、命令的で、規定的で、干渉的な指導、教育と全ての教授法は、神性の作用に則って人間の根元的不可侵性と健全性において見るならば、必然的に破壊的、抑圧的、滅亡的に作用する」という結論に至るのです。所詮、与えられたものはどんなに高尚な知識や技能であっても、与えられたものにすぎません。例え、稚拙で不甲斐ないものに見えても、自分自身で身につけた体験や技術に勝るものはないのです。だからこそ、大人が子どもに干渉することをフレーベルは許さないのである。

フレーベルは、「それゆえに、教育、教授・指導は、根源的に、また、本質上、必然的に学び、追い求めるものでなければならないので、(保護したり、守ったりするだけでなく)、決して命令的なもの、規定的なもの、干渉的なものであってはならない」と彼の著書『人間の教育』に述べています。したがって、創設者フレーベルの意図を受けて、「子どもの園」での保育は(保護したり、守ったりするだけでなく)、決して命令的なもの、規定的なもの、干渉的なものであってほしくないのです。

命令しない、制限しない、干渉しない方法を提唱したフレーベルは単に教育方法の改善を提唱したわけではありません。命令する、制限する、干渉するという「指導」の方法を否定した根底には、子どもの可能性に対する信頼とがあるのです。試行錯誤しながらも最

終的には理解に達し、さらに一人ひとりの持ち味を生かした方法で知識や技術を開発していく子どもの姿を見てきたからなのでしょう。だからこそ、第2の方法として、「まずやってみてごらん下さい。あなたの関わりから、一定の関係において、何が生じてくるかを見なさい。そして、生じてきたものがどのような認識にあなたを導くかを見なさい」それからまた行動するという方法を提唱したのです。考えてから行動するという私達大人と異なり、行動してから考えるという子どもの質的差違に気づくこと、子どもは頭で考えるのではなく、身体で考えている、感覚で考えていることに眼を止めたフレーベルの「直観」こそ驚異に値するのではないのでしょうか。日本の幼稚園では、保育者が本を読んで子どもに聴かせることが当たり前になっていますが、見方を変えると、子どもの体験を大人が取ってしまっているのではないのでしょうか。子どもの中にも人に本を読み聞かせたい人もいます。保育者に代わって人に教えたい子どももいるのです。教師や大人が取り仕切る環境は子どもを受け身にするのではないのでしょうか。自分がやれることだけやるということは、一見、わがままな行為に思えますが、自分にできないことは、できる人に任せるという行為が伴うわけです。すなわち、人を信頼していなくてはできない行為であると考えられるでしょう。反対に、人を信じない場合に、何でも自分でしてしまおうとする行為が起こると言えます。全て自分が取り仕切るか、自分ができるように辛くても頑張ることになるわけです。できないことをできるようになるように努力する姿勢は一見立派なようにみえますが、根底に人を信頼せず、一人だけで生きようとする孤独な行為であり、見栄や絶望、羨望や嫉妬などの非建設的な発想が基盤になっているとも考えられます。教師や大人が陥りがちな、良かれと思いこんで子どもにしてやることは、子どもにとって余計なお世話でしかないと思なされます。お節介焼きが子ども抜きで自己満足する行為は保育ですらないと考えます。周りの目を気にすることと周りを意識することは同じではないからです。自分にできないことでも、周りにできる人が必ずいる。自分がイヤで楽しくないことでも、周りにスキで楽しんでできる人がいるのです。人は一人で生きているわけではありません。子どもは日々の生活の中で、できないことはできない、と背伸びせずに言うし、必ず誰かが僕はできるからしようかと申し出ていることが特徴的なのです。フレーベルが部分的全体の思想で伝えたかったこと、大人や保育者が受け身になることで確認したかったことは、子ども達が日々の生活の中で体験している、人を信じ、人と一緒に協力して生きている姿にあるのです。だからこそ、子どもから学ぼう、子どもに生きようと大人に勧めたのではないのでしょうか。

コムト・ラスト・ウンズ・ウンゼルン・キンデルン・レーベン

Kommt laßt uns unsern Kindern leben !
 さあ 私たちの 子ども達に 生きよう !

フレーベルが好んで用いたゲーテの上記の標語は、私たち大人が「遊ぶ大人」になることで、自己に内在する神性を自覚し、天国に最も近い子ども達から学ぶことを意味しています。大人が子どもを指導するという発想に比べると、子ども達こそ私たち大人を天国に導くメシアであるとする逆転の発想なのです。階級や権力闘争を好み、競争原理や社会ダーウィニズムを基盤とした私たちの世代がもたらしたものは、不信と殺伐さと無気力でした。明治以降の日本の幼児教育が辿った道は絶望と破滅に至る道だったようです。どうか、皆さんの世代こそ、私たちの過ちとは無縁の世界になりますように。未来を創造する子ども達の可能性が守られますように。キリスト者フレーベルが地上に天国をもたらそうと創設した「子どもの園」が本来の使命を果たしますように。父と子と聖霊の御名においてお祈りいたします。